窓のおおい家

立間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
窓のおおい家

【Ｎコード】
Ｎ２１１４Ｗ

【作者名】
立間

【あらすじ】
両親から家を贈与された笹田優は、久しぶりの実家で一人暮らしを始める。しかし一人で一軒家に住むのは寂しく、優は誰かと一緒に暮らすことを考え始める。

引っ越し

家を貰った。

笹田優が引っ越しをしたのは、それから二ヶ月ほど経ってからのことだった。何しろ仕事をそうそうまとめて休むわけにもいかなかったし、引っ越しは必要以上に面倒な作業だった。役所への届け出、免許の住所変更、水道やガスや電気やネット回線の手続きは煩雑で手間がかかった。

優は連休の前後三日に有給を取り、その六日間を使ってなんとか居を移した。まだ残暑の残るころで、体を動かすとすぐ汗が吹き出た。優は化粧もせず、首にタオルまで巻いて荷物の片付けや家電の設置をした。

全部が終わったのは五日目の夕方のことだった。優はばたりと畳の上に寝転がり、しばらくい草のにおいと冷たい感触をあじわった。天井の格子模様を眺め、その格子の数を数え上げようとした昔のことを思い出した。

この家は優の両親のものだった。優はここで赤ん坊から高校生までの時間を過ごした。高校で寮に入り、大学で一人暮らしを始めてからは、この家には長期の休みの時にしか来なくなっていた。

距離としてそう遠いわけではない。かつてニュータウンと呼ばれていたこのあたりは、東京駅まで一時間で着く。ただしバスと電車を細切れに乗り継がなくてはいけないし、そのバスも十一時前には終わる。周りにはほとんど店がない。以前はコンビニもあったのだが、それも潰れて今では夜九時までの生協しか生活用品を買う店はなくなった。優が就職のために東京にきても、実家暮らしを選ばなかった理由の一つがこれだった。かつてのニュータウンも今では高齢化が進み、閑静すぎるようになっている。

その家に住むことになったのは、両親が別の家を買ったからだった。両親は既に両方とも六十を超えているが、早々からリタイア後

は田舎暮らしをすると決めていた。北海道の札幌郊外に安い家を買った。そして残された家の管理を一人娘の優に託して移り住み、今ではあちらで犬まで飼い始めた。優はその犬や、作り始めたという畑の写真をメール添付で何枚も受け取っている。二人とも実に楽しそうだった。いいことだ。

ふと気づくと、外の空気が青くそまっていた。日暮れだった。優は急いで起きて、家中のカーテンを閉めてまわった。夏をむねとしているのか、この家はやたらに窓が多い。リビングなどは優より背の高い窓が庭に面してはめ込まれている。網戸に吹き込む風で、カーテンがふわりふわりと波うった。

「ささ、引っ越したんだっけ？」

休み明けの職場で、何度目かでそう聞かれた。

「はい、まあ実家だからあんまり新しい感じはしないですけどね」

社員食堂で、久しぶりに山藤に会った。会うなり聞かれたが、もう返し方になれているのでよどみなく言葉を口にできた。

「いーじゃん、その年で持家でしょ？　まじうらやましいわ」

山藤は優の前の部署での先輩だった。二歳年上だが、部署で一番のやり手で、今度課長に昇進するらしい。

「うちなんかさ、兄弟三人だしだいたい実家秋田だし。ヨメにも買おうよって言われてんだけどさ」

山藤は昨年結婚した。まだ日が浅いからか、ヨメという言葉には少しの遊びが含まれている。

「そうですか？　私はなんて言うか、たなぼた的に貰っただけですし、全然自分の力で手に入れてないですけど、山藤さんは自分の力で買えるんじゃないですか」

「いやー、厳しい厳しい。式でだいぶ使っちゃったしさ、今節約中なのよ。ていうかさ、今度遊びいってもいい？　ささんち。小倉とか仁科とかに酒持ってかせるからさ」

山藤は前の部署の後輩たちの名を挙げた。前の部署、東京営業部

一課は仲間意識が強かった。仕事が終わるとよく飲みに行き、仕事のないときもバーベキューや花見に行った。優はそういう雰囲気もけして嫌いではなかったので、山藤にも「ぜひ。一人で一軒家だとなんだかさみしい感じがするんですよ」と調子を上げて答えた。

実際に山藤たちが来たのは、それから二週間後の土曜日だった。

「いやー、駅から遠くないっすか、ここ。横浜っていうからおっしゃれーな感じかと思ったら、全然違いますね」

そう言ったのは仁科だった。仁科らしい、許される範囲と許されない範囲の境目をきちんと計算した上での軽口だった。

「最初にそれ？　いいでしょ、住宅街なんだから」

優はそう返した。一課にいたころの、ひんぱんにおちょくり合ったことが思い出された。

「いや、でも静かで住みやすそう。広いし、庭もあるし。いいねえ一軒家」

優が抜けた現在では唯一の女性課員である、物上が言った。休みの日というのにばしばしとした格好をしている。優は自分服装とは対照的だと思った。今日は五分袖のチェックシャツにカーゴパンツだけを着ていた。

「山藤さん、これどこ置きますか？」

「そんなん家主に聞けえ、家主に」

「笹田さん、この野菜とか肉とかどこ置きますか？」

一番最後に入ってきたのが、小倉と山藤だった。一課には課長の鈴木含めあと四名いるが、それぞれ別の用で来られなかったらしい。

家の二階にはベランダがある。家の中から電気を引き込み、五人はそこで焼き肉をした。空の色が夕暮れのオレンジから濃い青にかわり、そしてだんだん空に星が目立ってくる。その間に五人は肉を焼き、野菜を焼き、缶をいくつも空けた。

蚊を防ぐために、途中で優は席を立って薬箱から蚊取り線香を出した。ベランダのすみに蚊取り線香をおくと、その薬っぽい煙のにおいがあたりに流れた。

「あ、懐かしー。実家っぽい」
「ほんとだ、久しぶりに見た」
優もマンション暮らしをしていたころ、蚊取り線香など買ったこともなかった。それなのに自然とこういう行動をとったのは、この場所のせいだろう。昔、夏休みに親子三人でベランダでそうめんを食べたことがあった。そんなことはここ十年すっかり忘れてしまっていたのに、優はかるがると記憶からそのシーンを取り出すことができた。記憶はこの家のあちこちになすりつけられていて、こちらがいくら忘れたつもりでも強引に頭の中に割り込んでくる。
夜の十時を回って、一課の面々は帰っていった。優はバス停まで皆を送った。街灯はぽつぽつとしていて辺りは暗く、しんとしていた。その中で皆の声だけが陽気で、辺りに響いていた。
家に帰ると、優は急に家の中がしんとしているのを感じた。冷蔵庫のモーター音まで聞こえる。優はテレビをつけ、その音を背に聞きながら缶を洗った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2114w/

窓のおおい家

2011年8月29日03時37分発行